リレートーク

市民による市民のための仕事おこしを促進する「協同労働の協同組合法」の実現を

永戸 祐三（日本労働者協同組合連合会）

協同組合が19世紀に始まった運動だと言うのは知っていましたが、私自身がそれに関わり、「協同組合をやっています」とすらすら言葉が出てくるようになったのは全く最近のことです。私の社会運動との関わりは16、17歳の頃から学生運動で、その後労働組合運動に関わっています。その頃は協同するとか協同組合というのはいかにもまどろっこしい感じがしていました。1968年の頃は、若い人の間の共通語は「闘う」という言葉でした。今は「オルタナティブ」とかハイカラな言葉ですが、我々の時は「闘う」とか「革命」とかです。ところが革命というのはなんぼ闘っても近づく実感がない。何かちがうと感じている中で、失業対策事業に就労する労働者の労働組合から、仕事おこしの運動がはじまり、自らそれに深く関わる中で、現在の労働者協同組合につながってきたわけです。

先ほど小菅さんが自分がやっている実践が大学生の学びの場のようなものになっている、学びの場の基本は出会いだと言われました。人の出会いといろいろな劇的な場面に自分がいられたとか、出会いは人だけでなく書物だとか様々な出会いの中で、私自身は協同組合運動を理念的にも感覚的にも身につけてきたように思います。

以前、私はおごり高ぶって闘う存在なのだから、家庭を持っても振り向きもしないという人間像をすばらしいとどこかで感じていたわけです。PTAとか行ってくれと言われてもそんなもの俺は行けない、子どもは親の背中を見て育つなどと言っていました。劇的に私自身を変えさせられたのが、今20歳になる2番目の息子が脳腫瘍といわれた時です。今大学に通っていますが直りきっていません。この子の3回の入院中、病院に通いながら仕事をする中で、本当の人間らしい生活はどういうものかを知らされたということ、そして全日自労という失業対策事業で働く労働者の労働組合に入って、しょうゆや米や塩を貸し借りしながら生活をつなげ、何とか子どもをまともに育てよう、自分たちに余裕があるわけではないけれど助け合いの中で人々の生活があり労働組合運動が生きていることを知ったわけです。こういう歴史や活動と出会って、自分の生活上に起こった問題も含めて協同組合というものに感化する契機がつくられ、労働者協同組合というものを「発見」していく過程があったように思います。そして体系的にこれだと思ったのは1980年のレイドロー報告でした。

もう一つは親父から受け継いだことだと思

います。私の家は戦争をのがれて神戸から京都の丹後に疎開していました。1960年前から教員の勤評反対闘争だとか、警職法だとか、60年安保だとかいう頃に、田舎では保守系の人が圧倒的に多くて、戦争疎開者は排除されるわけです。勤務評定反対などの取り組みをしているときに、何の正当な理由も話し合いもなしに、自民党の機関紙がこういっているから正しいんだということで押し通してしまうという感じがあった。強いものが強いというだけで横暴的に振る舞うという姿に人間的な義憤を感じて立ち上がるというおやじの姿を見てきた。学生運動の時もずーっと自分の中にあった「金を持てば何でもできる社会」これはおかしいじゃないか。親の制止を振り切って自分で生活するからと、70年安保のときに東京にいたいというだけで、中大の夜間部に働きながらいたのですが、それまでは生活の全部を母親がやってくれていたので180度変わってしまうのです。そこでもいろいろなところで働く労働者を知りました。

本題に入りますが、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済が90年代に入り完全に行き詰まったわけですが、バブルが始まったときに高度成長は転換すべきでした。これをさらに狂乱的に進めたのがバブルです。バブルが始まったときにすでに高度成長は終わったんだ。しかし、それに代替する社会経済のあり方は誰にも明確に見えなかった。見えないながらこの10年間、地域の生活の中では新しい時代を画するようなことが様々に作られていた。1968年から70年にかけての学生運動のような派手さはないけれど、多くの人たちが地域や生活の原点から人間らしさをかけて、なにがしかの力を出して自分たちの思いを実現したいと。それが協同集会という形の中で実感できたのが1996年の仙台の集会だったと思います。さらに98年の広島での協同集会で、意味あることを自分の力で成し遂げてみたいという1,500、2,000ぐらいの小さな様々な集団の姿を見たときに、長い時間かけてそういう流れが地域の中で生まれていたことを知った。むしろ狂乱的なバブルの崩壊の中で、その活動は加速的に広がっていたということです。

しかし政治は振り返ることもなく銀行などビックビジネスに何十兆円もの金を投入して助け、今回の企業の決算も好調だと出ています。あれを見たときに日本の経済が良くなって私たちの生活もよくなると思った市民はもはやいないと思います。税金をいっぱいつぎ込めば企業に金が残るのは当たり前、税金をいっぱいつぎ込んで働いている人をリストラして首を切ったら利益が残るのは当たり前、そのことによって企業が社会にどの程度貢献しているかを見たらほとんど何もない。こういう世の中が作られてきたし、公共事業も根本的に見直されてこなかったということでしょう。

一方で、社会は「自治と分権」の時代に確実に移行しようとしている。その中で市民の自覚の高まりと合わせて、市民の手による活動が加速度的に進むのではないか。介護保険制度の施行はそれをいっそう促進した。介護に関すること全てを自己完結しょうとする市民の思いは、それに止まらず、基本的な要素を地域で完結できるようにしようとその認識を発展させるように思います。介護保険が良いか悪いかを問うたときに、措置制度よりは介護保険制度がいいのは当たり前だと思いますが、それ以上に措置制度から解放されたことにより市民がこの制度を動かすことに参加できる。それによってただ自分にまかされた細切れの１時間ではなくて、要介護者の自立を促進するためにどういう地域になったらい

いかみんなが考える。このことが介護保険制度を導入した意味なのだと思います。
市民が自らの力で市民のために介護を地域に必要な仕事として成り立たせる。市民の力で解決する。事業を事業として成り立たせることが地域の問題を市民が解決するという大きな流れにつながっていく。そういう流れを市民は作ろうとしている。地域を動かし、コミュニティを形成し、人間らしいものにしていくことの主人公は、国家でも自治体でもなく、企業でもなく、そこに存在する市民がその流れを作っていくという時代の到来だと私は思います。

その意味で労働者協同組合法と言っている、市民による市民のための仕事おこしを促進する「協同労働の協同組合法」が絶対的に必要な時代になったと思いますし、「協同労働の協同組合」が雇用労働に対し協同労働を定義付け、労働の中にもう一つの労働があることを示すのだと思います。

この3年間ほどヘルパー講座で走り回ってきました。労働者協同組合と高齢者協同組合で3万2～3千人を育成してきました。「この地域で仕事をしていきたい。自分はニチイやコムスンで雇われたいと思わない。儲けようとも思わない。価値あることをしたい。どうしたらいいんだ」という声を多く聞きました。
もし、ここに「協同労働の協同組合法」があって誰もが仕事を起こせるといわれれば、ヘルパー講座にきた8割方の人はその道を選んだはずです。それがないからしかたなくコムスンやニチイに行った。とたんにああいうリストラが始まった。コムスンの折口氏に言わせると「方向転換だ」と、「ベンチャービジネスだから高らかにやれたし、ベンチャービジネスだから即刻方向転換できた」と、首切られた1,400人はどうしたらいいのか。「もうかればいい」という連中の本質をいやというほど見せ付けられている。

市民のこころにあるのは、儲けるための事業ではなく、そこで人間が生きようとすれば、生活を豊かにしたい、地域を豊かにしたいは、自分を大切にしたいという思いと相手も大切にしたいという思いにつながるのだと思う。
アメリカで精力的に著作活動をしているピータードラッガーが言っています。20世紀は政府と企業が爆発的に発展した世紀だった。しかし、そのために肥大化した都市には人間が人間を実感できる共同体が何も作られていない。これを作ることに政府も企業も成功しなかった。これは非営利協同組織にまかされた任務だ。21世紀は非営利組織の爆発的な発展が期待されている。この非営利組織に協同組合も入っていると私は理解しています。

そうすると、今までゼネコン型の公共事業にすがっていれば多くの企業も助かったという、そんな時代が去っていく。結局仕事おこし、新しい事業はコミュニティに深く根ざすことと、人間の命に根ざすことがなければ本物の社会も生まれないし、それに貢献する事業も生まれないということになっていく。
協同労働の協同組合（労働者協同組合）が日本の協同組合の連絡協議会に入れていただいたのは、先ほど話された小橋さんの努力です。日本協同組合連絡協議会の規約では、10の協同組合があって、10の協同組合で構成すると書かれていた。新しい協同組合の誕生や加入を想定していない。その規約に「等」を入れていただいて労協が加盟組織になった。従って、私たちは「等」の協同組合という存在になっています。
協同労働の協同組合法が提起していることは、協同組合が雇用労働を絶対視するものなのかを問いかけていくことになっている。協同組

合の中に雇用の部分を明らかに減らしていって、協同労働に流れを変えていこうということを促進することにもなるし、自立的な労働文化の形成はほんものの協同組合づくりにもなっていくと確信する。

ロバートソンさんが労働の歴史はより大きな自由と平等への発展の歴史でもあるとおっしゃられた。協同労働の協同組合がこれを発展させるものであれば、人間の個性的な働き方と、一人一人の思いを結び合う労働として、協同労働が存在する。そういう時代へ労働は発展していくだろうし、特に女性が支えている協同労働が方向を決定づけるでしょうし、高齢者、障害者の自立と社会参加に大きく可能性を開く方向を「協同労働の協同組合」は切り拓くものになるであろうと思います。

モンドラゴンについて書かれたマクラウドさんの本も、協同が創るコミュニティビジネスという新しい観点で書かれている。こういう観点で読むと参考になるし、明日のそれぞれの分科会に出る方は是非読んでいただきたいと思います。

新しい世紀が始まる、これを人間の世紀にするために協同労働の時代が始まるということを合い言葉にしてがんばりあっていきたいと思います。

参加者の感想文より

岩浅えり子さん（センター事業団関西事業本部）

記念講演：ロバートソンさんのお話、とても分りやすいものでした。世界の経済の変化の方向性が見えると共に、今までの労協が取り組んできたことの正しさを実感した。協同労働＞自分の組織の都合だけでなく、広く生きている人間が取り組むことのできる労働を再度思いました。

リレートーク：今までの協同集会は沢山の体験が語られ、時には「うちの組織、やり方が正しい」みたいな論議があったが、今回の体験報告は自分たちの組織が地域社会、人間の生活を変えていく、それをつなぐものとして協同労働が語られたと思う。「協同を拓く」に相応しいリレートークでした。センター自身も本当の意味で労協をつくらないとおいていたれそう。

中西さんの言っておられた社会参加をみとめた介護保険制度を作りたいです。元気な高齢者づくり、ねたきりでもいいその人らしい暮らし方を見つけ直したい。竹内先生の言っているコミュニティケアの核の考え方になりそう。今日の一日、今までにない充実感でした。私だけでしょうか。

平山基生さん（沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動）

記念講演：グローバル化はアメリカを意味していますから、これに対する批判は適切だと思いました。

リレートーク：善意の方がたの活動に敬意を表します。障害者と高齢者の連帯、教育現場から外へでての活動、生ゴミリサイクル、その他みな良い活動でした。

「市民会議宣言」中の世界の先進国で、法制化されていない国はない、とのことにつきもう少し知りたいと思いました。法制化の場合の法案文はもう出来ているのでしょうか？明日の分科会はでられませんので。

松谷清一郎さん（センター事業団広島）

記念講演：協同組合の現在までの流れが少し理解できたように思います。ジェイムスロバートソン氏の話の中で、「労働する権利は責任ある個人として生きる最も重要な人権の一つである」の言葉が、私には協同組合員一人一人が考える必要があるのではと思いました。

リレートーク：特に中西正司さんの当事者主体の福祉サービスの話が心に響く思いです。私自身も高齢の母をもち、介護制度にたいして考えていかないといけないと思いました。恒川ご夫妻のリサイクル活動の話も現在もっとも考えていかなければならないものであり、地域活動に適したものだと思います。今回の参加は初めてで協同集会とは何かすこし分ってきたように思います。私と同じように組合員の中にはなぜ協同組合があるのか、また一人一人が自分の権利、責任労働の喜びをわからない人も多いと思います。これから帰って皆と考えて行きたいと思います。